九州大学学術情報リポジトリ
Kyushu University Institutional Repository

九州大学附属図書館伊都図書館の改修

大村, 武史
九州大学附属図書館事務部伊都地区図書課

https://hdl.handle.net/2324/1905545

出版情報：Medical library. 63 (3), pp.235-238, 2016-09. Japan Medical Library Association
バージョン：
権利関係：

九州大学附属図書館伊都図書館の改修

大村　武史*
九州大学附属図書館事務部伊都地区図書課

Ⅰ．はじめに

九州大学（以下，本学という）は，箱崎地区，六本松地区，原町地区のキャンパスを統合移転するために，福岡市西区元岡・桑原地区，糸島市（旧前原市，旧志摩町）にまたがる新キャンパス（伊都キャンパス）の整備を実施している。2005年10月，伊都キャンパスにおける工学系の開校と同時にオープンした理系図書館は，移転の各ステージに対応した名称変更や改修を経て，現在はおもに工学系，理学系，教養系をサービス対象とする伊都図書館として機能している。今回の報告で取り上げる改修は，移転第Ⅲステージ（2012～2018年度）のうち，2015年度に実施された理学系移転に伴うものであり，伊都図書館3階部分を暫定的に使用していた数理学研究院の講義室等を撤去し，図書館として再整備するための工事であった。本稿ではこの改修の内容について，詳細を述べる。

Ⅱ．経緯

1．今回の改修内容

伊都図書館3階を暫定的に使用していた数理学研究院の移転に伴い，講義室等を撤去し図書館として整備するため，3階の全面改修と吹き抜け部分を封鎖しての大規模な天井の耐震工事を実施した。また，今回の改修を機会に，1，2階についてもその役割を再検討し，館内全体の動と静とのゾーニングを設定しなおすことによって，再整備を実施することにした。この改修により，伊都図書館は地下1階から地上3階までの4フロア，建物全体が図書館として完成し，全館オープンとなった。

2．改修の方針

改修の方針については，おもに図書館職員で構成される理学系移転施設設備検討チームを中心に検討を進め，最終的には伊都図書館検討専門部会と附属図書館商議委員会での承認を得て，決定にいたった。以下に，改修方針の形成にいたるまでの過程を説明する。

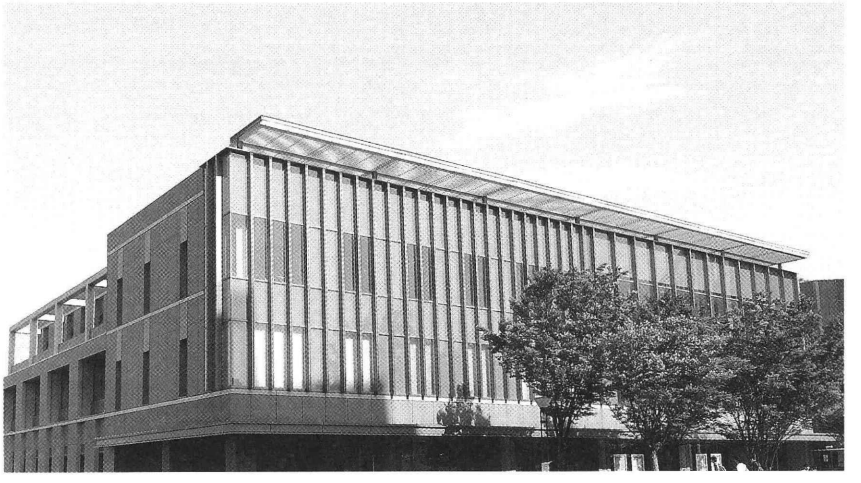

写真1．伊都図書館全景

*Takeshi OMURA：〒819-0395 福岡県福岡市西区元岡744.
（2016年6月6日　受理）

Presented by Medical*Online

改修以前，伊都図書館の1階は「理系図書館資料配架計画（2005）」にもとづいて，学術雑誌・基礎科学資料を配架，サービスするフロアとして運用していた。しかし，図書館を取り巻く環境の変化により，次第に検討を要すべきいくつかの課題が生じるようになった。大きなものとしては，電子ジャーナルの普及により当初計画よりも新着学術雑誌の購読タイトルが減少したことによる書架の余剰や，グループでディスカッションのできるオープンスペースの需要の高まりなどがあげられる。また，設備的な面でも，人感センサーによる書架照明と天井の間接照明のみの1階は暗いという利用者の声もあり，改善が求められていた。さらに，本学の国際競争力の強化，国際通用性のある体制づくりという構想に対応するため，図書館においても場や資料の提供による国際化の支援が必要となってきた。そこで，今回の改修では，単なる3階の改修のみを実施するのではなく，それぞれの課題をあわせて解決するために1，2階の一部についても改修の対象とすることにした。また，改修にあたっては，1階を動の空間（明るく活気あるラーニングコモンズを設置），2階を動と静の中間（落ち着いた雰囲気の国際交流ラウンジを設置），3階を静の空間（一人で集中できる半個室，読書スペースを設置）と明確に定め，新たなゾーニングで改修にのぞんだ。

3．改修期間中の運用

改修工事は2015年8月から2016年2月にかけて実施した。工事のうち，特に閲覧席への動線をふさぐ1階の改修，吹き抜けまわりをすべて封鎖する天井の耐震工事（**図1**）は利用者への影響が大きく，配慮を要した。改修にあたっては，できるだけ閉館日を少なくすること，かつ利用しやすい空間を保持することを目標に，1階改修の際には吹き抜けまわりの席を利用できるように維持し，吹き抜けまわり閉鎖の際には1階のラーニングコモンズをプレオープンするなど，工期が重ならないように調整し，閲覧席への動線や一定の席数の確保に努めた。

Ⅲ．各階のゾーニング

1．1階

1階は，学術雑誌の減少によって余裕の生じた書架の一部を撤去し3階に転用することで3階の書架設備導入費を抑制するとともに，書架撤去後の空間をオープンスペースとして確保し，あわせて旧来の照明をLEDに取り換えて，明るい動の空間，ラーニングコモンズを設置した。ラーニングコモンズの設置にあたっては，グループでのディスカッション，また授業・講習会等での利用の2つの観点から，検討を進めた。

まず，授業外においても学生間で協力して課題に取り組むことが求められる授業の増加を受けて，その授業外活動としてのグループ学習を支援する場を提供するために，自由に配置を変えられる可動式の什器を中心に導入し，色合いについても明るいものを選定するなど，アクティブな空間の創出に努めた。また，各所に可動式のホワイトボードや壁面ホワイトボードを設置して，数式の記述など理系ならではの利用に備えた。特に壁面ホワイトボードについては，ホワイトボードが劣化した際の取り換えが容易なように，壁にマグネットタイプのホワイトボードを取り付けるなどの配慮をした。

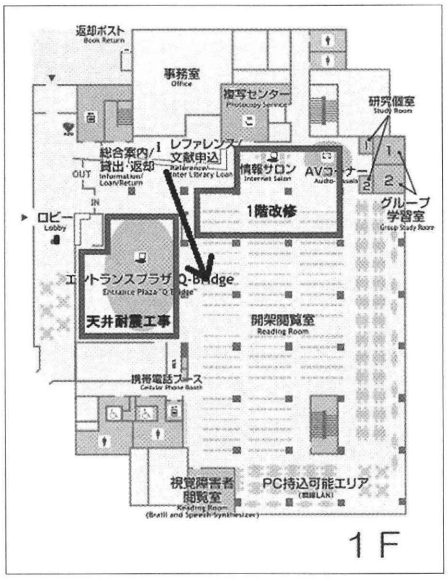

図1．動線説明

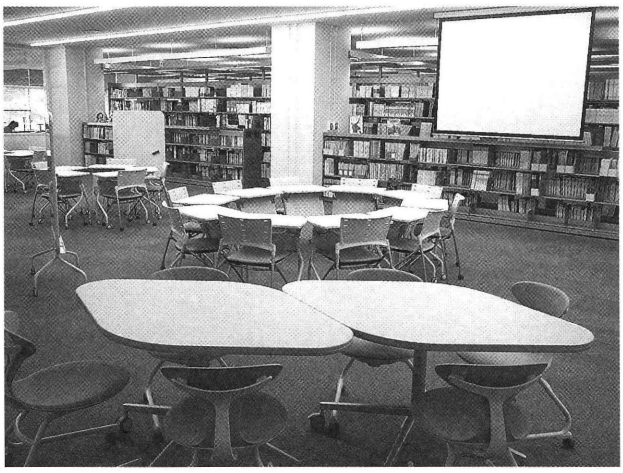

写真2．ラーニングコモンズ

Presented by Medical*Online

一方で授業・講習会等での利用を想定して，1クラスの最大単位である50名規模での開催が可能なように，折りたたみ，かつスタック可能な1人用の机・椅子や，スクリーン・高輝度プロジェクタなどを選定した。また，本学では学生の個人用PCの必携化が実施されているため新たに据え置きのPCは導入しなかったが，PCを用いた実習形式の授業・講習会等にも対応できるように，無線LANのルータを増設し，ネットワーク環境の改善をはかった。

2．2階

2階は，ゾーニングとしては動と静との中間となる階であり，吹き抜けと大きな窓ガラスに面した開放的な空間の有効活用も考えて，国際交流を促進するためのラウンジを設置した。本学では，国際化を推進しており，伊都図書館でもその一端を担うことを目的としている。

ラウンジの設置にあたっては，九州大学国際化学生委員会（Student Committee for Internationalization of Kyushu University，以下SCIKyuという）の学生との打ち合わせを重ねて，彼らと今後協力してイベント等を実施するために適した什器を選定した。1階のラーニングコモンズとの差別化をはかるために，キャスターのない，かつ落ち着いた色合いの什器を配置するなど，アクティブなイメージになりすぎないように留意した。

また，あわせて各国の語学や文化を学ぶための資料も設置した。特に語学学習については，英語多読用の資料を多数そろえるなど，入門者に向けた資料の充実をはかった。

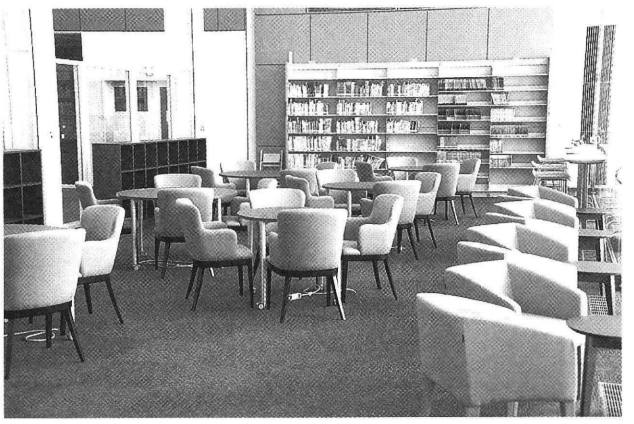

写真3．国際交流ラウンジ

3．3階

3階は，静の空間とするため，個人での学習や読書に適したスペースを設置した。もともと伊都図書館には個室は2部屋しかなく，試験期間中などの繁忙期には，集中できる個室が不足していた。そこで，静かに学習できるスペースとして，圧迫感のない什器で囲った占有感のある半個室を10室設置した。うち1室については，車椅子でも利用できるように，電動で上下昇降するタイプの机を用意した。また，見晴らしのいい南東側に，学習に疲れた際にリラックスできるよう大きめのゆったりとした椅子を配置するなど，長時間の滞在に備えた空間づくりを意識した。

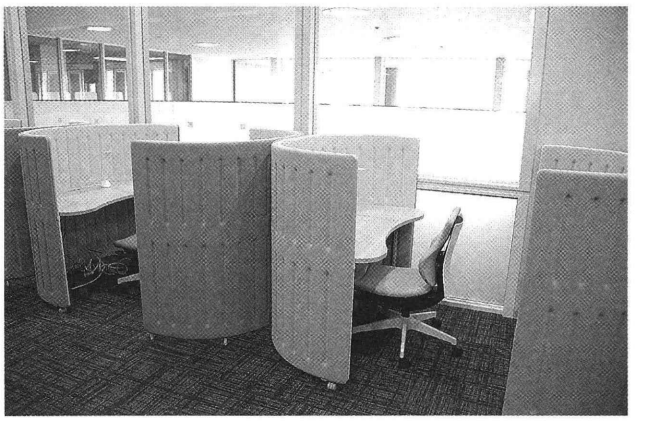

写真4．半個室

Ⅳ．改修後の状況と課題

1階のオープンスペースに設置したラーニングコモンズは，メインカウンターからそれほど遠くないためか，当初危惧していたまわりの迷惑となるほどの私語はほとんどみられない。適度に議論の声をあげながらの学習は，こちらの意図していた範囲におさまっており，動の空間としての再整備がうまく機能しているといえる。

可動式の什器は必要に応じて組み替えられて，グループで学習しやすい環境づくりの一助となっている。また，ホワイトボードの利用はこちらの想定よりも多く，板面が数式で埋め尽くされているケースも少なくない。特に壁面ホワイトボードについては，自主的なゼミのようなものまで実施されるケースもあり，理系にこそ大きなホワイトボードが必要なのだと実感した。

講習会等を開催した際には，オープンスペースであるため場所がわかりやすく，仮に迷っていてもカウンターから近く誘導しやすいなど，場所としてのメリットが大きい。ラーニングコモンズは，書架に向かう動線にも隣接しており，講習会の様子をみての飛び入り参加も多く，入口に近い1階に動の空間を設置する有効性がうかがえる。また，什器が可動式であることから，講習会中に机

Presented by Medical*Online

の配置を変更してのグループワークの実施など，多様な対応が可能となっており，講習会の効果が高まることも期待できる。実際，2016年5月に実施したレポートの書き方講座では，レポートの添削演習をグループワークで実施しており，終了後のアンケートによる参加者のコメントから，グループワークが好評であることがわかった。

2階の国際交流ラウンジでは，前述のSCIKyuとの連携により開催された，英語で本の紹介をする“Hon☆Bana in English”というイベントによって選定された資料を展示するなど，少しずつではあるが国際化を促進する交流がうまれている。

また，新たにThe Self-Access Learning Center（以下，SALCという）との連携も模索している。SALCでは，留学を視野に入れた語学力も国際意識も高い学生に対して，様々な支援を実施している。一方で伊都図書館では，SALCを利用できるまでのレベルにいたっていない学生に対して，その語学力の向上のための資料を提供している。そこで，国際交流ラウンジの設置を契機に，語学学習資料の近辺にSALC関連のイベントのポスターを掲示するなど，図書館資料を用いる語学学習の入門者を，留学支援まで対応可能なSALCへと誘導するという動線を意識した広報を開始した。現在のところ，明確な効果までは検証できていないが，伊都図書館での掲示開始後のSALC関連のイベントの参加者は多く，広報として機能している印象を受ける。今後はSALCの取り組みに関連した資料を図書館にそろえるなど，蔵書構築の方面での連携も期待される。

3階の半個室は，もともと既存の個室が少なかったこともあり，長時間滞在しての利用が多く，10室すべてが埋まっていることもめずらしくない。利用者の利用形態をみるに，空いていれば予約せずに自由に使用できることや，使用時間の制限がないことなど，既存の個室と異なる点が利用の促進につながっているようである。

改修後の伊都図書館のゾーニングは，こちらのコンセプトのとおりに機能しており，おおむね成功しているということができる。しかし，本学のキャンパス移転は依然継続しており，箱崎地区移転完了後に伊都図書館が総合的な自然科学系図書館「理系図書館」となるまで，そのサービス対象や蔵書構成は，段階をおって変化していく。改修が完了したからといって，これで終わりということはなく，今後もその都度柔軟に変化に対応することが求められる。

Presented by Medical*Online